

序

2002年に米国腎臓財団から、慢性腎臓病（CKD）の概念が提唱され、比較的早い段階から、慢性に経過する腎疾患に対して包括的な介入を行うことが重要であるということが示された。それから早10年以上が経過し、CKDの概念は広く浸透してきた。この、CKDの概念で重要な点は、腎予後・生命予後という、予後を中心に据えた概念であるという点である。従来、リンコントロール、副甲状腺ホルモン・骨の異常が目されるが多かった、骨・ミネラル代謝においても、生命予後、骨折といった「アウトカム」を重視する概念である、慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常（CKD-MBD）という概念が提唱されたのは、必然的な流れであったのかもしれない。CKD-MBD自体は、KDIGOが2005年9月にMadridで開催した、controversies conferenceに由来する。このときの会議の名称は“Definition, Evaluation, and Classification of Renal Osteodystrophy”であり、当初からCKD-MBDという名称ではなかったことも興味深い。いずれにしても、この会議において、従来の腎性骨異常栄養症(ROD)は、CKD-MBDの一つの病態であり、生命予後、骨折といったアウトカムを重視しながら、血液検査の異常、骨の異常、異所性石灰化といった全身性の病態として骨・ミネラル代謝異常をとらえようということが決定された。

CLINICAL CALCIUM誌で2012年にCKD-MBDについての特集を企画させていただいた。このときには、CKD-MBDの概念が提唱されて5年が経過し、CKD-MBDという名称自体についても、浸透してきた時期であった。折しも日本透析医学会から、「慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常の診療ガイドライン」が発表された直後でもあった。今回その内容を発展的に単行本とさせていただく機会をいただいた。CKDの合併症の中でも、CKD-MBDの領域は、基礎から臨床にわたって、新たな知見が数多く得られている領域である。治療法においても、新規リン吸着薬、calcimimeticsなど新たな手段を我々は得てきている。今回の単行本化にあたっては、前回同様、CKD-MBDに造詣の深い先生方にご執筆いただくことができた。本書は、CKD-MBDの領域において、何が明らかになってきていて、今後どのような方向性が求められているのかということについて、道しるべとなる内容になっているのではないかと考える。

諸先輩方を前にして、私がこのような大役を仰せつかったことを、恐れ入る次第であるが、快くご執筆をお引き受けくださった諸先生方にこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。また、最期に様々な点でサポートしてくださった、医薬ジャーナル社の方々にも感謝したい。第一線で活躍の先生方の論文から、CKD-MBDについてなお一層、知見が深まることを信じて止まない。